

何故《聖マタイの召命》の誤った解説が是正されないのか？

2020・2024改訂版

真鍋友範

《聖マタイの召命》はカラヴァッジョによって1600年に描かれたのだが、描かれた当時から混乱を招いた絵画であった。

多くの観衆にとっては、いったい呼び出されるマタイはキャンバスの何処に居るのか、それが明確に判らないのだ。

ローマ中が大騒ぎになった理由の一つは、そこにあったのだろう。



その最初の理由は、見る側の姿勢にあると考えられる。

I 細かく見ないで、大雑把に瞬間的な印象で絵画を判断してしまう。

これは、現代人の絵画鑑賞の習慣に由来する。現代絵画はまず直感的な内容把握からスタートする。主体的独断的な判断が許されるどころか、推奨される。好き嫌いも重要な判断基準だ。直感的であるが故に細かい部分は意識される事無く、無意識に脳裏から削除されることになる。

さて、具体的に聖マタイの召命に当てはめると、次の誤判断が生じる。

イエスが曖昧な指差しポーズで召命（呼び出し）を行った為、髭の男は、人差し指を不完全に伸ばして自分かと聞き返している。召命の途中の情景だ。

この判断の場合、イエスの右手以外の、左手や足の示す重要なジェスチャーは無視され、同時に髭男の左手の親指の示す重要なジェスチャーも同様に無視されることになる。

絵画の中の一部の表現のみを捉え、見る側が自分の判断に都合良く組み立てるのだ。

この誤解釈は、誤っているにせよ支持者の絶対数が多い。実際イタリアではこの説が定説らしい。絵画に詳しくない一般の観衆の最も多い判断なのだ。

次の解釈は1980年代にドイツでの論争から導かれた新解釈だ。

イエスの力無い右手によって指さされた導きの意思是、髭の男の左手の中指の動きに仲介され、俯いた若者に注がれる。髭男の左手の中指は若者を指さしている。イエスの曲がった指先の示す人物がマタイとすると、最も近い。

イタリア説が否定された理由の一つは、帽子だった。中央部三人がいずれも帽子姿なのは、日中外からこの場所（収税所）にやって来た人だからというのが根拠だ。だとすると、俯いて金計算に夢中な座った若者こそマタイにふさわしい人物となる。これを仮にドイツ説としよう。

この解釈をする場合、その根底に絵画への偏見が見られる。それは、絵画を

スナップ写真のような、瞬間描写であると決めつける見方であろう。瞬間の描写が絵画であるとする偏見はよくあることだが、西洋の物語絵画（宗教画、神話画）の世界では、時間軸に沿って物語（＝場面）を順追って読みとるという心の作業が不可欠であることを忘れてはいけないのだ。これを省略すると、大変な判断の間違いを犯すことにつながるのだ。

この場面は、聖書のほんの数行の既述から、カラヴァッジョが脚本をイメージし、17世紀のローマの庶民の風俗を背景に描いた時間順に進行する物語なのだ。従って、【時間順に進行する画面上の物語】とは何なのかを解説できなければ、正しい鑑賞に到達出来ないのだ。

ところが、【イタリア説もドイツ説も、画面上で進行する物語が一切細密に再現されていない】。画家はこの物語の構築にエネルギーを注いで描いているのにも関わらず、見る側が物語の構築状況に興味を示さないのだ。

この鑑賞行動をとる人々は、描かれた内容を知ろうとする興味がなく、描かれた内容から遊離して勝手な思い込みで絵画を見るという暴挙を平気で行うのだ。

だから、カラヴァッジョのリアリズム絵画のもつ本当の意味での革新性が見えていないのだ。

では、第三の真説を紹介しよう。

この場面のストーリーは、最初はイエスの視線を感じた髭男の質問の動作から始まります。『お探しの人は、私ですか、それとも隣の眼鏡の人ですか』と、2段階の質問を、親指と人差し指のジェスチャーで行います。人差し指の方向は、デッサン上あきらかに隣の眼鏡男です。質問を受けたイエスは、まず左手で質問を受容します。次に目指している眼鏡男の顔がみえるよう左に一步踏み出し、次に右手を上段から振り回すように、《向こう側を示す動作》を行います。ここまで3段階の連続動作です。そうです。イエスの右手は指さしのジェスチャーでないのです。手首に力を込めず、指先にも力を込めていませんが、少しだけ人差し指が前に出ます。上段から廻したイエスの右手は、イエスの見ている眼鏡男の顔附近の位置で止められます。そしてイエスは言います。『私に従いなさい』それを聞いた上級の収税人である眼鏡男は、机に寄り掛かった3点支持体勢（立っていません）から、直ぐに上体を起こし、一行に従います。

カラヴァッジョの描いた繊細な描写こそ、読み取る対象だ。おおざっぱな鑑賞姿勢は絶対駄目なのだ。カラヴァッジョは実際のモデルを描いたリアリズムの画家だったのだ。表現上細部へのこだわりがあるからこそ、描き貯めたデッサンの流用による再現では駄目だったのだ。

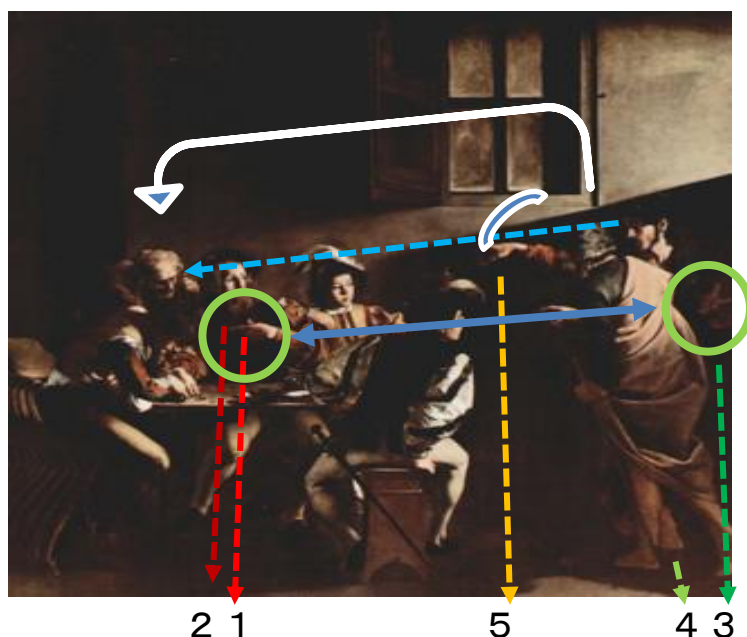
また、即時的な理解を拒否する描画内容であり、かつ常識的な思い込みや先入観を拒否する描画内容、これがカラヴァッジョの描いた宗教画の世界なのだ。

しかも表現は極端に近代的だ。まるで19世紀に発明される映画表現を夢見て200年先取りしたような、連続動画の世界をバロック期の絵画上に演出して見せたのだ。

このルネサンス期には到達していなかった《迫真のリアリズム表現》と、《連続する具体的なストーリー表現》の融合した描画こそ、当時の画家達を圧倒的に心酔させた理由なのだ。

カラヴァッジェスキたちは、そのカラヴァッジョ絵画の神髄を理解していたからこそ、彼の表現方法に追随したのだ。

参考：



- 1) 親指を胸に当てる髭男の動作「私をお探しですか」の瞬間
- 2) 人差し指の動作「それとも、隣の眼鏡の老収税人ですか」の瞬間
- 3) イエスの【開いた左手】による質問応答動作【答えよう】の瞬間
- 4) イエスの【右足が一步左側へ位置移動】した瞬間

その意味は【眼鏡の老収税人の顔が見える位置への視点移動】

5) イエスの【右腕・手首の回転動作】の完結した瞬間

【手首より先に力無し・指差し動作では無い。召命対象者の顔付近でイエスの回された手は止まる。】「向こう側の眼鏡の人だ。」の意味
この場面でイエスは言う。「私に従いなさい。」